

ジャン・コクトーの日本訪問（補）

西川正也

1936（昭和11）年5月、フランスの詩人ジャン・コクトーは、十九世紀の小説家ジュール・ヴェルヌが作品中で空想した「八十日間世界一周」を二十世紀に実現するために企画された旅行の途上で、日本を訪れることになった。この訪日については、これまでも「ジャン・コクトーの日本訪問（1）～（6）」（「共愛論集」「共愛学園前橋国際大学論集」）および『コクトー、1936年の日本を歩く』（中央公論新社）の中で検討を重ねてきたが、これらの論考の発表を機に、筆者のもとにはいくつかの有益な指摘や未見の資料が寄せられるところとなった。

本稿は、この「コクトーの日本訪問」に関して、これまでに発表した文章では紹介することのできなかつた事柄や、新しく指摘のあった事実について、あらためて整理しなおすことを目的としてまとめられたものである。

1 コクトーの見た日本

コクトーが訪れた昭和11年春の日本は、依然として、同年初めに起きた二・二六事件後の戒厳令下にあった。その旅行記の中でコクトーは、天皇を中心とする当時の日本の社会の在り方について、冷徹な筆致で繰り返し叙述している。

日本はいまだに戒厳令下にあり、軍部の若い指導者達はファシズムの独裁者を擁立しようとしている。（中略）

しかし私は言っておきたいのだ。自殺、つまり集団のため、集団を要約する天皇のために個人が捧げるあの犠牲の力こそが、すべての微笑、すべてのお辞儀の奥底にあるのだということを。あの浮世絵の花々は地中に曲がりくねった暗い根を沈めているのだ。

1)

コクトーが日本に滞在した期間はわずか一週間に過ぎず、上のような見解も、東京での案内役を務めた堀口大學や、あるいは同宿の外国人滞在者らによって示されたものであったかもしれない。しかしその短い滞在期間のうちにコクトーが、その後の日本がたどることになる道程を予言するかのような多くの言葉を残すに至ったという点については、これまでに発表した文章の中で指摘したとおりである。

コクトーはまた、天皇をめぐる当時の日本の状況について、次のようにも記している。

車輪の形をした都市・東京の、皇居は轂〔車輪の中心部〕であって、すべてはその周りを回転している。その灰色の石垣も、澱んだ水をたたえた幅広い濠もけっしてミカドを垣間見せたりはしない。彼が旅に出る際には皇居から駅までの間、群衆はひざまずき、目を伏せる。渋滞を招くという理由から、現在では警察が群衆にひざまずくことを許してはいないが、すべての交通は遮断される。雨戸は閉ざされ、窓からミカドを覗こうとする野次馬は盲目になる恐れがあるので、誰もあえてそれを試みる者はいない。皇居は、この義務の宗教の法王庁である。2)

詩人が皇居の横を通過した際に同じ車中であつた堀口大學は、その皇居（かつての江戸城）を中心として放射状に広がる東京という街の姿をたちどころに推察してみせるコクトーに、感嘆するほかはなかつたと随筆の中で記している。また上の引用の後半部分、天皇が外出する際には、盲目になることを恐れて群衆がみな目を伏せるという挿話は、おそらく堀口がコクトーに教えたものであろうが、今日では「妄信」の一言で片付けられてしまふかもしれない、天皇に対する人々のこうした「信仰」が、その時代にあつてはけっして一笑に付すことのできないようなものであつたことは、次に挙げる詩句からも読み取ることができるだろう。

土下座（憲法発布） 高村光太郎

誰かの背なかにおぶさつてみた。
上野の山は人で埋まり、
そのあたまの上から私は見た。
人払をしたまんなかの雪道に
騎兵が二列に進んでくるのを。
誰かは私をおぶつたまま、
人波をこじあけて一番前へ無理に出た。
私は下におろされた。
みんな土下座をするのである。
騎馬巡査の馬の蹄が、
あたまの前で雪を蹴つた。
箱馬車がいくつか通り、
少しおいて、
錦の御旗を立てた騎兵が見え、
そのあとの馬車に
人の姿が二人見えた。

私のあたまはその時、
 誰かの手につよく押へつけられた。
 雪にぬれた砂利のにはひがした。
 ——眼がつぶれるぞ—— 3)

これは、第二次大戦後に高村光太郎（1883－1956）が自らの戦争中の姿勢を省みながら、自身の生涯を振り返る形でまとめた連作詩『暗愚小伝』の中の、最初的一篇である。ここに描き出されているのは明治憲法発布の翌日の光景であるが、明治16年に生まれた高村少年の耳に残って離れなかった「眼がつぶれるぞ」という言葉は、実際にそれを信ずる者が多かったかどうかは別として、コクトーが来日した昭和11年にまで受け継がれていたのである。

また、比較文学研究者の杉田英明氏からは「peeping Tom」の語源ともなった、イギリスのゴダイヴァ夫人の説話と、コクトーの前記引用との類似性についての御指摘を受けた。十一世紀イギリスのある地方の領主だった夫に厳しい課税をやめさせるために、ゴダイヴァ夫人は裸で馬に乗り、市内を行進するという誓いを立てた。共感した市民たちは家に閉じこもって夫人を見ないようにしたが、トムという男だけがその裸身をのぞき見たために、神罰が下って失明した、というのがその説話である 4)。

コクトー自身がこの有名な説話を知っていた可能性は高いだろうが、相互の関連性は別としても、見ることを禁じられた権力者をのぞき見た者は、罰として視力を奪われるという教訓、あるいは信仰が、洋の東西に共通するものであったことは興味深いところである。

ところで、高村の『暗愚小伝』中に「眼がつぶれる」という表現があることを指摘してくださったのはドイツ文学者の信貴辰喜氏であったが、氏にはまた、皇居が「義務の宗教ヴァチカンの法王庁である」というコクトーの表現に関しても、亀井勝一郎（1907－1966）の「擬似宗教国家」論の存在を教示していただいた。天皇と結びついた戦前の国家体制に関する論考は現在にいたるまで様々な立場から繰り返されているが、少なくとも、当時の日本を「擬似宗教国家」と規定し、「『神』を模造するといふ途方もない冒険を冒し、国民に強制するとともに自らも呪縛され、手のつけられないやうな異様な複雑さを現出した」5)と考える亀井の視点は、日本は「religieux（宗教的）な国だ」6)と語ったコクトーの見解に通ずるものと言えるだろう。

旅行記の中での、天皇に関するコクトーの記述は多分に直感的なものであって、精密な分析に基づいているとは言えない部分も少なくはない。しかしたとえば「集団を要約する天皇のために個人が捧げる犠牲の力」といった詩人の言葉が、昭和11年の日本ですでに書き記されていたことは、やはり記憶に留めておくべきであろう。

こうしたコクトーの簡明な表現に比べると、次に引く亀井の文章

天皇制の真の恐るべき害毒は、天皇自身に犠牲を強要すると同時に、国民にその何万倍かの犠牲を強要しうるその形式の裡にある。(中略) 架空の存在となるにつれて、また天皇の自由意志の極度に「無」となるにつれて、今度は「天皇」といふ名だけが濫用されるに至ったことである。天皇の「名」による戦争遂行をはじめ、政治、裁判、教育、取締り、一切が「名」の濫用によつて行はれた。7)

等は遥かに分析的であるが、亀井がこうした詳細な記述によって説明しようとした概念を、「集団を要約する天皇に対する個人の犠牲」というわずか一行によって表現してしまうところが、かえって詩人としてのコクトーの本質を示していると言えるのではないだろうか。

コクトーはその鋭敏な詩眼で、巨大な荒波に呑み込まれる直前の日本の社会を鮮やかに切り取ってみせたが、もちろんこの詩人が日本人の上に注いだ視線は、そうした冷ややかなものばかりではなかった。たとえば旅行記の中でコクトーは歌舞伎や相撲の見物に興ずる人々についても詳細な描写を行なっているが、国技館を揺るがすほどの観客の熱狂や、歌舞伎座の観衆が役者のために払う静寂の意味について、詩人は共感と敬意をもって書き記しているのである。

また、拙著に関する精細な書評を「図書新聞」に寄せてくださったコクトー研究者の山上昌子氏によれば、詩人は後年になって、東京で「すばらしいアニメーション」を見たとも語っているとのことである 8)。同じく戦後になってから「どうして日本の画家や映画制作者たちは、天然色の漫画映画を作らないのだろう。(中略) 版画の伝統を持つ日本から漫画映画が外国へ輸出されないというのは不思議なことだ」9)とも述べているコクトーであれば、彼が日本を訪れた際に「漫画映画」を見て、好ましい印象を持ち帰った可能性は高いだろう。

ただしコクトーが東京で見たというその作品については資料が見つからないために、特定することはかなり困難である。アニメーションの歴史をひも解くと、実は戦前の日本でも今日考える以上に多くの漫画映画が製作されていたことがわかる。『くももちゅうりっぷ』(昭和18年、演出脚本・政岡憲三)、『桃太郎 海の神兵』(昭和20年、監督脚本・瀬尾光世)等の作品は現在でも知られているが、コクトーが来日した昭和11年に限ってみても、『雀のお宿』(政岡憲三)、『お猿三吉 おいらの戦艦』(瀬尾光世)、『ちんころ^{へい}平平玉手箱』(大藤信郎)、『おいらの非常時』(山本早苗)、『居酒屋の一夜』(村田安司)、『マー坊の東京オリンピック大会』(佐藤吟次郎、千葉洋路)、『新説カチカチ山』(市川崑)、『お日様と蛙』(宮下萬三)、『凧さわぎ』(西倉喜代治)など、多くの短篇作品が公開されているのである。10)

コクトーはこの他にも、靖国神社に付設された軍事博物館「遊就館」に立ち寄ったり、銀座の画廊で開催されていた画学生の展覧会を訪れたりもしているが、そんな詩人が東京

滞在三日目の夜に出演したラジオ放送で、スピーチのための題材として選んだのは六代目菊五郎の演じた歌舞伎『鏡獅子』であった。

このラジオ放送については、番組でも通訳を務めた堀口大學が自身の随筆の中でその概要を書き残している。私たちはこれまで堀口の記した文章と、当時の新聞の番組予告からその放送の内容を推測できるのみであったが、平成 17 年から 18 年にかけて日本各地を巡回した『ジャン・コクトー展 サヴァリン・ワンダーマン・コレクション』における展示品（堀口家所蔵本）の中に、「SALUT AU Japon（日本への挨拶）」と題するコクトー自筆の原稿が含まれていることが確認された¹¹⁾。この貴重な資料については、おそらく近い将来、コクトー研究家の手によって詳細な検証が行なわれることになるにちがいない。

2 コクトーと日本の画家たち

藤田嗣治

コクトーがその生涯において最も深い交わりを持った日本人画家が藤田嗣治であることを、否定する者は誰もいないだろう。そして、そうしたコクトーと藤田の関係についてはすでに何度も論じてきたので、本稿でそれを繰り返すことはしない。しかし、戦後フランスに渡った藤田とコクトーとが 1955 年に共同で出版した『海龍 Le Dragon des Mers』に関してだけは、ここでもう一度触れておく必要があるだろう。

この書籍は、コクトーの世界一周旅行記の中から抜き出された日本に関する文章に、藤田が二十五点の挿絵版画を添えた、豪華限定本であった。献呈品を含めても百七十五部しか印刷されず、コクトーの全集にも収録されていないため、筆者はこれまでその内容を直接参照する機会を持つことができなかったが、その後、藤田の作品を多く所蔵する「平野政吉美術館」の学芸員・坂本槇子氏から、コクトーの「序文」や藤田の版画図版のコピーを提供していただくことができた。

藤田の挿絵についてはここに掲載することができないが、コクトーの序文に関しては、『海龍』の出版後はおそらく活字になったことがないと思われるので、やや長くなるが、その全文をここで紹介することにしたい。

Je n'ai jamais compris sur quoi se fondait le concept de supériorité de la race blanche. Avouerai-je même que, dans mes voyages, chaque fois que je traversais un peuple de couleur, je me sentais en proie à quelque honte.

J'errais, parmi ces magnifiques créatures de bronze ou d'or dont le moindre geste me représentait l'élégance, avec la triste certitude qu'il y avait maldonne et que c'est de l'Orient que mes compatriotes au visage pâle eussent gagné beaucoup à recevoir des missionnaires au lieu d'en envoyer dont l'entreprise consiste à supprimer des privilèges sans les remplacer par d'autres.

Lorsque je revenais du Tour du Monde, en 1936, j'étais accoudé sur le pont du

navire avec Charlie Chaplin. Nous approchions du Golden Gate. Chaplin posa la main sur mon épaule et murmura près de mon oreille : « Nous rentrons chez les sauvages. »

Encore gorgé de spectacles nobles, nous revenions dans le monde occidental, où la politesse orientale et ses mille nuances demeurent lettre morte.

Un jour d'hiver que le prince Gengi se rendait chez une des étranges dames dont il était amoureux, on arrêta sa litière pour balayer la neige. Le prince voulut dégager une branche de sapin couverte d'une masse de neige douce et lourde et légère. En se redressant, la branche fit sauter cette neige sur la manche de soie noire du prince et de sa manche elle glissa sur le sol. Et, nous dit la conteuse, Gengi « éprouva une grande solitude », car il n'avait personne à qui raconter une chose si belle.

Pendant plusieurs siècles, le Japon, pour défendre ce prodige d'élégances, de démarches, de parfums reconnus entre mille, de sentiments (ceux des Samourais par exemple transcendant toutes les formes de l'amour), de suicides après la moindre ombre sur le cœur, de théâtres où la transposition des sexes ne prête point à rire, de jeunes femmes d'une grâce si parfaite qu'on les dirait marchant immobiles sur une terre qui se déroule sous elles, bref, pendant des siècles de secrets jalousement gardés et protégés contre le progrès où l'âmes prétentieuse dégresse, le Japon a ouvert ses portes.

Seulement, on ne gaspille pas vite un trésor accumulé depuis plusieurs siècles et les temples embaument le monde brutal qui les brûle, et le dragon tourne autour de l'île, protégeant la richesse invisible et la troupe de spectres contre lesquels les plus terribles bombes ne peuvent rien.

Cyclones, raz de marée, progrès, machines peuvent feindre de détruire les maisons de papier, les poissons qui flottent sur les toitures. Costumes et coutumes peuvent s'éteindre. Le moins sensible des touristes n'en constate pas moins que l'île est hantée par des puissances qui puisent justement leur force et leur héroïsme dans une faiblesse exquise et dans la plus extrême douceur.

Jean Cocteau

1955 12)

フランス語を専門とされる方は、上記の原文を直接御参照いただいたほうが正確だと思われるが、一応、以下いくつかの部分に分けながら、若干の解説とともに日本語の訳文を提示してみたい。

白色人種の優位性という概念が一体、何に基づいているのかを私が理解したことは、これまでに一度もなかった。旅の途中で、有色の人々の間を通り抜けるたびに、ある種の羞恥心に襲われるような感覚があったことさえ、私は告白しておこう。

どれほど些細な仕草にもその優雅さが表われているような、それらの、ブロンズや黄金色の美しい人間たちの間を、私は哀しい確信とともに、さまよったのだった。それは、これまで〔の歴史〕は何かの手違いであって、真白な顔をした我が同国人たちが、別のものでも埋め合わせることもせずに〔東洋人の〕特権を奪い取るために宣教師を送り出す

かわりに、むしろ東洋からの使節を受け入れることによって、多くのものを得ることができたかもしれないのに、という確信であった。

先に述べたとおり、この『海龍』はコクトーが旅行記の中で日本について触れた部分を新たにまとめなおしたものであった。しかもそこに絵を添えているのは、この本が出版された年にフランスに帰化したとはいえ、日本出身の画家・藤田嗣治であったから、その序文が自ずと東洋や日本を称賛する内容になってしまうのは仕方のないところであろう。

ただし上のコクトーの文章を今日、読みかえすと、そのほとんどが東洋人に対する讚美や、白色人種としての懺悔になっているにもかかわらず、行間のどこかに白人に生まれた者としての余裕のようなものが感じ取れてしまうのは、やはり私たちが日本人であるからなのだろうか。もちろんコクトー自身は、いくつもの詩行の中で黒人たちへの賛辞を綴っているし、旅行記の中でも東洋人の美意識に対する共感の言葉を書き連ねるなど、けっして白人至上主義者であったわけではなかった。ただコクトーは、あまりにも純朴な「有色人種讚美者」であったがために、「白色人種」と「有色の人々」とを対置するような思考法そのものが、かえって「白人的」であることにおそらく気がつかなかったのであろう。

そうしたコクトーの人種観が垣間見られるような上の文章の後で、詩人は日本にも立ち寄ることになった「八十日間世界一周」の旅へと話題を転ずることになる。

1936年の世界一周旅行の帰途、私はチャーリー・チャップリンとともに船のデッキの手すりに肘をついていた。私たちは〔サンフランシスコの〕^{ゴールデンゲート}金門橋に近づきつつあった。チャップリンは私の肩に手を置くと、耳元で、こうささやいた。「私たちは野蛮人の許に帰っていくのだよ」

日本へと向かう船の中で初めて対面したチャップリンと^{はぐく}育むことになった友情について、詩人はこの世界旅行における最良の収穫であったと書いているが、そのチャップリンもまたコクトー以上の親日家であったことは、広く知られるとおりである。おそらくその最大の理由はチャップリンの秘書が日本人であったことに求められるだろうが、1932（昭和7）年に初めて来日した際には、五・一五事件に絡む暗殺計画に危うく巻き込まれそうになったにもかかわらず、日本の人々や風景に深い愛着を覚えた喜劇王は、その後、三度にわたって日本を訪れることになったのだった。

ところでそのチャップリンとコクトーとが船上での出会いを果たしたのは、喜劇俳優の二度目の来日の際のことであった。この時のチャップリンは最初の訪問時の暗殺未遂事件の影響もあって、日本での行動をほとんど公にしなかったため、同時に来日したフランス詩人に報道陣の取材が集中する形となり、結果としてコクトーの動静が連日の新聞紙面を賑わすことになったのは不思議な因縁と言うほかないだろう。

話を『海龍』の序文に戻せば、先ほどの一節を受けて詩人はさらに次のような文章を綴

っている。

高貴なる情景に心満たされたまま、私たちは西洋世界に戻ってきたが、そこでは東洋の礼儀正しさや、その限りなく繊細な機微はすでに死文化しているのだった。

ある冬の日、源氏の君は、心を寄せる風変わりな婦人のうちのひとりの家に赴く際に、雪を払うために輿^{こし}を停めさせた。柔らかで重く、また軽い雪の塊におおわれた樅の枝を、君は取り除けることを望んだ。枝は再び立ち上がろうとして、君の黒絹の袖に雪をはじき、その雪は袖から地面へと滑って落ちた。そして（と作者は私たちに語る）、これほどに美しい出来事を話す相手がいないからという理由で、源氏は「大いなる孤独を覚えた」のである。

コクトーはここでは、東洋の「限りなく繊細な機微」を象徴する例として『源氏物語』の一節を引いている。このフランス詩人と『源氏物語』との関係については以前にも触れたことがあるが、コクトー研究の専門家である笠井裕之氏は「コクトーと日本」と題する文章において、さらに詳細な論考を展開されている¹³⁾。

氏によれば、コクトーが目を通した『源氏物語』は、アーサー・ウェイリーによる英訳本ではなく、その英語版を重訳したキク・ヤマタによるフランス語版であった可能性が高いという。また、コクトーによる『源氏』への言及は、1930年に発表された『阿片』においてまず行なわれることになったが、私たちにとってより興味深いのは、1944年に没した劇作家ジャン・ジロドゥに関する「追想」文の中で、上の『海龍』序文とまったく同じ箇所が引用されていることであろう。（なお『源氏』原典と「ジロドゥ追想」におけるコクトーの引用との関係については、笠井氏の「コクトーと日本」における精密な検証を参照されたい。）

たち花の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に松の木のをのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も名に立つ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがなど見給。14)

樅の木が雪に埋もれているのを、隨身をお召しになって、お払わせになった。それを羨み顔に松の枝がひとりで起き返って、その拍子にさっと落ち散る雪も、「名に立つ末の松山か」という歌の趣に見えるのを、さして深い嗜みはなくても、こうした風情にあわれを覚えて一通りに受け答えの出来る人であったら興も乗るであろうにと御覧になるのであった。（円地文子訳）15)

ここに引いたのは『源氏物語』「末摘花」の一節であるが、この原文と、コクトーによる「ジロドゥ追想」、そして『海龍』序文とを比較すると、後の二者ではコクトーが記憶によ

って引用を行なっているためか、あるいは故意にそうしているのか、叙述の内容が徐々に変化しているのを見て取ることができる。ことに最後の『海龍』においては、読後二十数年を経た引用であるためか、コクトーの中には記憶の精髓となる部分だけが残り、袖を滑り落ちる雪の美しさについて語り合う相手がいないという「大いなる孤独」がいつそう強調されることになって、原文とはまったく異なる詩的世界が形成されているといっても過言ではない。（一方、私たち日本人が「末摘花」と聞けば、むしろ鼻の紅い滑稽な女性像をまず思い浮かべるのではないだろうか。）

こうして『源氏』における感覚の繊細さを原典よりもむしろ純化する形で紹介した後で、コクトーはこんなふうが続けている。

幾世紀もの間、日本は、この奇跡のような優美さや、歩み方や、^{あまた}数多の中でもそれとわかる芳香や、感情（たとえば、サムライの感情はあらゆる形の恋愛を超越する）や、心に少しの曇りもなく行なわれる自殺や、性の転換がいささかの笑いも招くことのない劇や、あまりにも完璧な優美さを身につけているために、足元で^{ひら}展げていく地面の上を不動のまま歩いているように見える若い娘たちを、守ってきた。つまり、魂を思い上がらせ、かえって退歩させてしまうような進歩に対して、大切に守られ、保護されてきた秘密の諸世紀のうちに、日本はその扉を開いたのである。

ここではコクトーは、書物の中に見出したものと、人々に教えられたもの、そして実際にその目で見たものとを^な縋い交ぜにしなが、日本が守り続けてきた伝統的な美質について綴っている。「優美さ」や「歩み」「芳香」「感情」「心に曇りなく行なわれる自殺」といった特質は、おそらく先の『源氏物語』をはじめとする文学作品の中に詩人が読み取ったり、あるいは日本滞在中に誰かに教えられたりしたものであつたらう。

一方「性の転換が笑いを招くことのない劇」とは、コクトーが日本で観た「歌舞伎」や「都をどり」を指しているし、「地面を不動のままに歩く娘たち」も、やはり彼自身が日本の街路や料亭の座敷で実際に目にした和装の女性たちの姿であつたにちがいない。（なお「不動のままに歩く」というこの表現はまた、コクトーが制作した何本かの映画に登場する、地面を滑るように移動する者たちや、重力に逆らってゆっくりと進む人々を想起させるものでもある。）

そしてコクトーは、そうした美質を長く守り続けた末に日本が「扉」を開いた後のことに言及する。

しかし、〔日本の〕人々は何世紀もの間に蓄えられてきた財宝をすぐに浪費することをせず、寺社は、それら〔寺社〕を焼こうとする粗暴な世界をも香気で満たしている。そして、最もすさまじい爆弾でさえも無力であるような霊の群れや、目に見えない富を守りながら、一匹の龍がこの島を取り巻いているのである。

この一節は、次のように読みかえることができるだろう。つまり、「進歩」の時代が訪れ、またたとえ戦争によって深く苦しむことがあったとしても、日本は決してその特質を失うことはないだろう、なぜならこの列島は一匹の「龍」によって護られているのだから、というのである。

ところで、この「龍」（書名では「海龍」）とは、海に取り囲まれた国・日本を守護する存在、あるいは「龍」にも似た日本列島の形を考えれば、日本そのものを寓意するものであるとも考えることができる。もちろんこの書名の選択にあたっては藤田が何らかの関わりを持っていた可能性が高いが、「龍に護られた国＝日本」という^{イマージュ}比喩はコクトーの心を強くとらえたと見えて、「海の龍に守られた日本の宝 *Le Trésor japonais gardé par le Dragon des Mers*」というエピグラフがこの本の巻頭に添えられてもいる。

そしてコクトーは、これからの日本に対する次のような見解によって、この序文を締めくくることになる。

^{サイクロン}台風や津波や進歩や機械が、紙で作られた家々や、屋根の上をただよう魚〔鯉のぼりのことか〕を破壊したように見えることはあるだろう。^{コスチューム}衣装や^{クチュール}風習が、絶えることもあるかもしれない。しかしそれでもなお、最も敏感ではない旅行者でさえも、この島には、精妙な^{弱さ}と^{極限の穏やかさ}のうちこそ、その強さと偉大さの淵源を持つような、いくつかの力が宿っていることを認めないわけにはいかないだろう。

上に引用した『海龍』の序文が書かれたのは、1955年。1936年春の訪日から約二十年の歳月が流れているが、その間に世界が大きな変貌を遂げたことはここに記すまでもないだろう。しかしこの文章を読むかぎりでは、日本に対する詩人の認識が戦争の前と後で根本的に変わることはどうやらなかったようである。災害や機械文明によって昔日の街の姿が失われたり、時代とともにその風俗が変化することは、あるかもしれない。しかし日本の本質——外見上はどれほど穏やかに見えたとしても、その内奥に強固な力を秘めたその本質だけは、決して変わることはないだろうという、この最後の一節は、来日時に残した次のような詩人の言葉とも呼応するものだったからである。

六十年ごとに地震と^{サイクロン}台風とによって自分達の習慣を破壊されることを余儀なくされたこの国の人々は、灰燼からやり直すことを受け入れてきた。死が、彼らのすべての行為につながっている。彼らは忍耐を以てこの苛酷な運命に従い、高価な木材と^{わら}藁と紙とで造られた家をあらかじめ犠牲として捧げているのだ。16)

日本の女性にはふはふはとして、微風に翻へる薄絹といふか、胡蝶といふかさういふ柔かく軽い感じと、その反面に鉄の筋でもはいつてあるかと思はれるやうな堅さがある。

17)

1955年の、この『海龍』共同出版が、コクトーと藤田の交流に関して本稿筆者が正確に確認できた最後の機会であった。しかし別の資料によれば、コクトーが世を去った1963年にも、詩人の文章に画家が二十一点のリトグラフを添える形で『四十雀 La Mésangère』と題する豪華本（二百六十一部限定）を出版したとの記録がある。参照することのできたいくつかのリトグラフ図版からの推測によれば、本の内容は日本と関わりのあるものではなかったようだが、機会があれば、この本についてもまた検討してみたいと考えている。

なお最後になるが、フランス文学・比較文学文化の専門家である平川祐弘氏からは、戦後のパリで直に接した藤田の人となりや、その戦争画等に関する興味深い御見解をお寄せいただいた。コクトーとの関わりという観点からはやや離れるため、それらを本稿で紹介することはできないが、感謝の念をここに記させていただきたい。

東郷青児

詩人と直接の交流を持つことはなかったものの、日本におけるコクトーの受容史を考える上できわめて重要な役割を果たした画家に、東郷青児があった。昭和5（1930）年に東郷が訳出し、挿絵を添えて出版したコクトーの小説『怖るべき子供たち』が大きな話題を集め、「恐るべき」という言葉が流行語にさえなるほどだったのである。

ところで、この作品の翻訳における東郷の役割については、ゴーストライターが下訳を行ない、画家は修正を加える程度であったのではないかという説と、東郷自身が翻訳を行なったのではないかという説の両者が存在している。以前に発表した論考の中でそれらの二説を紹介したところ、中江兆民や福沢諭吉の文章認定に長く取り組んでこられた井田進也氏から、次のような御助言をいただいた。つまり、画家自身の文章の中で接続詞や動詞にあてられた漢字や送り仮名等の特徴と、『怖るべき子供たち』の訳文とを比較してみれば、それが東郷本人による翻訳であるかどうかは容易に判定がつくだらうというのである。

筆者自身は残念ながら、まだ東郷の文章の特徴について十分なデータを集める時間を持ってないが、この問題については今後じっくりと取り組んでみたいと考えている。

また、この東郷や藤田嗣治の評伝作家であり、その著書の中では東郷＝ゴーストライター説を取られていた美術評論家の田中譲氏が、平成17年4月に逝去された。拙稿の中でも名前を引いた方であるため、簡単ではあるが、ここに付記させていただきたい。

3 コクトーと日本の文学者たち

堀辰雄

若き日に深くコクトーに傾倒し、雑誌等に発表した翻訳を『コクトオ抄』と題する一冊にまでまとめていながら、来日した詩人に会うことをしなかったのが小説家の堀辰雄であった。この作家がコクトーに会うことをためらった理由については、当時の堀がすでにコクトー文学の影響を脱していた点や、堀と並ぶコクトーの紹介者として知られていた堀口大學が昼夜を問わず詩人に張り付き、つねに行動をともにしていたことに対する羨望や嫉妬心などを挙げて説明したが、この問題に関しては、経営学が御専門ながら近代文学にも造詣の深い沖田健吉氏から、以下の二点にわたる御意見をいただいた。

そのひとつは、コクトー来日時の堀が、前年末の婚約者の死を契機として、生と死を静かに見つめる『風立ちぬ』を構想しつつあった——つまり堀がコクトーに代表されるヨーロッパの前衛的な文学から独自の静謐な文学世界へと徐々に移行しつつある時期にあった点。そしてもうひとつは、複雑な家庭環境の中で甘やかされて育った堀には、やや「発育不全」に近いわがままな性質があり、居合わせた林房雄に「訪ねていったらいいじゃないか」とからかわれたことによって、かえって頑なになってしまったのではないか、という点であった。

前者の御指摘についてはまったくその通りであろうし、後者の御意見に関しては今日では推測することしかできないが、林にからかわれた堀が「ひと言少年らしい高い声で、『うるさい』と怒鳴つた」18)というのだから、有り得ないことではなかなっただろう。少なくとも、今日では中村真一郎や福永武彦らの師としての印象も強い堀辰雄に、そうした感情的に幼い面があったと想像することは、その人物像をかえって陰影に富んだものにしてくれるのではないだろうか。

なお、堀辰雄におけるコクトー文学の影響に関しては、前出の笠井氏が「コクトーと日本」の中で、『ジゴンと僕』19)の例を指摘されている。『コクトオ抄』出版の翌年にあたる昭和5年に発表されたこの実験的な小説は、コクトーの『ポトマック』の翻案ともいうべき短篇であり、もしこの作品の執筆時期にコクトーが来日していたとすれば、堀がコクトーを訪問しないままに終わることはおそらくなかったであろう。

笠井氏はまた、本稿筆者が詳細は不明のままとしてあった、コクトーが来日の以前にフランスで読んでいた仏訳版の「西鶴」本についても、貴重な指摘を行なわれている。氏によれば、1927年に佐藤健(1886-1960)がフランス語に訳して出版した『Contes d'amour des samourais (サムライの恋愛物語集)』20)は、『男色大鑑』^{なんしよくおおかがみ}からの抄訳を中心として井原西鶴の「男色もの」を集めた短篇集であったという。同性愛的な傾向の強かったコクトーがこの作品集に惹かれた理由は容易に想像することができるが、コクトーが日本を語る際に時として用いる「サムライ」という概念の、ある部分は、実はそれらの物語によって形作られたものであったのかもしれない。

林芙美子、江間章子、朝吹登美子

コクトーと対面した日本の文学者の中で、最も「初々しい」感想を書き残しているのが林芙美子である。林の綴った文章を読むと、コクトーに出会ったときの高揚感や緊張がこちらにも伝わってきて、微笑ましくさえもある。

林芙美子におけるコクトー像については以前にも書いたとおりだが、この林とコクトーとの関わりについて堀口大學は次のような文章を記している。

林芙美子氏が巴里から、この時〔1929年〕作られたコクトーのレコードを持つて帰られたさうだが、実に楽しい美しいものだと聞く。（中略）林氏はまた、巴里でコクトーが作ったトオキイ『詩人の生活』〔正確には『詩人の血』〕を見てこられたさうだ。（中略）三千元あればこのフィルムを日本へ持つてくることができるさうだ。林氏は自分で持つてきたくなつた程このフィルムが好きだつたので三度も見に行つたと言つてゐられるさうだ。林氏はまたコクトーに会つてこられたさうだ。コクトーは自転車にのつて忙しげに駆け廻つてゐるさうだ。林氏と会見中にも、しきりに鉛筆を動かしてノオトをとつてゐたさうだ。林氏はいいことをされた。一度林氏から、コクトーの近況をお聞きしたいものと思つてゐる。21)

堀口がこの文章を書いたのは、その内容から判断すると、1931～32（昭和6～7）年にかけてのヨーロッパ滞在から林が帰国した直後のことだろうか。文面からは、堀口が林に直接聞いたのではなく、伝聞によってパリでの林とコクトーとの関わりについて知ったことが読み取れるが、コクトーの映画を三度も見に出かけ、レコードまで買い求めたことは林自身が実際に日記の中で記しているとおりである。

しかし、昭和11年の東京におけるコクトーとの対面について林が発表した文章を読むと、それ以前に顔を合わせたことがあるとはとても思えないような初々しい緊張感が伝わってくるし、なによりもパリでのコクトーとの会見について触れた林の証言はいまのところ見つかっていない。

忙しげに自転車に乗り、会見中も書き物をしていたというコクトーの姿はあまりにも具体的なものであり、堀口の文章は曖昧な仄聞として片付けるには惜しい内容ではあるが、本稿においては、パリでの林とコクトーとの対面は実際にはなかったものと考えておくことにしたい。

東京滞在中にコクトーが会見した女流文学者には、このほかにも詩人の江間章子氏があつた。江間氏は「夏が来れば思い出す はるかな尾瀬 遠い空」の歌詞で知られる「夏の思い出」の作詞者としても有名だが、その江間氏は平成17年の3月に91歳で逝去された。

氏自身がコクトーについて綴った文章はこれまでに目にすることがないが、来日したコクトーと直接言葉を交わした最後の芸術家であったかもしれない江間氏がこうして世を去られたことには、ある種の感慨を禁じ得ない。

鬼籍に入られたといえ、サルトルやボーヴォワールの友人としても知られた翻訳家の朝吹登美子氏も、平成 17 年 9 月に 88 歳で世を去られた（大正 6 年生）。朝吹氏は生前のコクトーとも交流があり、詩人の死の報せを聞いてコクトーの自宅に駆けつけた際の模様をテレビのインタビューで語っておられた姿がいまも印象に深い。1960 年にパリに赴いた三島由紀夫が、岸恵子が出演していた芝居を演出中のコクトーを訪問した際に案内役を務めたのがこの朝吹氏であったことは、三島自身が「稽古場のジャン・コクトオ」と題する文章の中で書き記しているとおりである。

中島健蔵と金子光晴

フランス文学者であり、文芸評論家としても知られた中島健蔵（1903－1979）は、来日したコクトーが日本ペン倶楽部でスピーチを行なった際の出席者の一人であった。前出の平川祐弘氏からは、中島の自伝には昭和十年代の日本を訪問したフランスの文化人たちに関する示唆に富んだ記述があることを御教示いただき、杉田英明氏からはコクトーについて中島が記した資料のコピーをお送りいただいた。しかし、この「中島健蔵におけるコクトー像」というテーマは、本稿の中で扱うには大きすぎるものであるため、機を改めてまた論じたいと考えている。

漂泊の詩人とも呼ばれる金子光晴（1895－1975）もまた、来日したコクトーに関する文章を残した一人である。金子自身は二度にわたるパリ滞在時代も、コクトーの訪日時にも直接このフランス詩人に会うことはなかったようだが、詩人の来日に際して金子が綴った随筆は、褒めすぎることも貶しすぎることもせず、あくまでも冷静な観察眼によって貫かれた貴重な証言となっている。この記事についてもまた、上の中島健蔵の文章と合わせて、次の機会に検証を行なう予定である。

冒頭にも記したとおり、本稿はこれまでに筆者が発表した「コクトーの日本訪問」に関する文章には収めることのできなかつた事柄や、新たに寄せられた意見等を整理しなおすことを目的として、まとめられたものである。したがって一貫した論旨や最終的な結論を本稿の中に求めるのではなく、これまでに発表した論考を補足するためのものとして、この文章に目を通していただければ幸いである。

また本稿では触れることができなかつたが、貴重な御意見や情報を寄せてくださった多

くの方々、特にアメリカで「コクトー美術館」を運営するサヴァリン・ワンダーマン財団の日本代表を務める藤沢健二氏には、この場を借りて感謝の意を表したいと思う。

注

1) Cocteau, *Tour du monde en 80 jours (mon premier voyage)*, Paris, Gallimard, 1936, p.165。なお本文中で引用するフランス語原文の翻訳は、特に注記のない限り、本稿筆者によるものである。

2)同、pp.166-167。

3)高村光太郎『高村光太郎全集』、筑摩書房、昭和51年、第3巻、276～277頁。なお本稿においては、原文で正字体が用いられている場合にも原則として新字体に改めて引用を行っている。

4) 蛇足ながら、ベルギーのチョコレートメーカー「ゴディバ」は、馬に跨ったこのゴダイヴァ夫人をシンボルマークにしている。

5)亀井勝一郎『亀井勝一郎全集』、講談社、昭和47年、第16巻、229頁、「現代史の課題」

6)堀口大學『堀口大學全集』、小澤書店、昭和56～63年、第6巻、298頁、「コクトオの見た日本」

7)亀井、前掲書、233頁。

8)「図書新聞」、平成17年1月29日付、第2711号。

9)小川正隆「カメレオンの死」、『本の手帖』、昭森社、昭和38年11月号、33頁。

10) 東京国立近代美術館フィルムセンター「日本アニメーション映画史」ホームページ

http://www.momat.go.jp/FC/NFC_Calendar/2004-07-08/kaisetsu.html

「東京国際アニメフェア」ホームページ

http://www.taf.metro.tokyo.jp/ja/news_a/20050923_02.html

他、参照。

11)その原稿写真の一部は、同展覧会の『図録』（アートインプレッション発行、平成17年、73頁）にも収録されている。

12)Cocteau, Foujita, *Le Dragon des Mers*, Paris, Georges Guillot, 1955, pp.9-11。

13)笠井裕之「コクトーと日本」、ジャン・コクトー展『図録』（前掲）、200～205頁。

14)新日本古典文学大系19『源氏物語一』、岩波書店、平成5年、226～227頁。

15)円地文子訳『源氏物語』、新潮社、昭和49年、第2巻、42頁。

16) Cocteau, *Tour du monde*, op.cit., pp.165-166。

17)「東京日日新聞」、昭和11年5月24日付朝刊、「コクトーを囲んで語る（二）」

18) 丸岡明「ジャン・コクトオと私」、『本の手帖』、46～47頁。

19)堀辰雄『堀辰雄全集』、筑摩書房、昭和53年、第4巻。

20) Saikakou Ebara, traduit de texte original par Ken Sato, *Contes d'amour des samourais XIIIe siècle japonais*, Paris, Stendhal, 1927。

21) 『堀口大學全集』、第6巻、285頁、「コクトオ・ノオト」

Abstract**THE VISIT OF JEAN COCTEAU IN JAPAN****Addendum**

Masaya NISHIKAWA

Jean Cocteau, a French poet who had left Paris in order to make his trip around the world in 80 days, arrived in Japan in May 1936. The articles on Japan made an important part of his reportage about the trip, which vividly related his experiences and his own view on this particular country where he was given an enthusiastic welcome.

Since I published several essays on this visit of Cocteau in Japan, I was offered some useful information and materials from specialists or readers of the poet. Consequently, I tried to examine in this essay the materials newly found and information kindly provided, and my analysis was made successively in the following chapters :

- I . Cocteau's view on Japan
- II . Cocteau and Japanese painters
- III . Cocteau and Japanese writers